

アートによる地域活性化の意義

—— 豊島における瀬戸内国際芸術祭を事例として ——

原 直 行

序. はじめに

本研究の課題は、アートによる地域活性化について地域住民にとっての意義を明らかにすることである。より具体的には、瀬戸内国際芸術祭 2010 が行われた豊島に住む島民にとっての芸術祭の意義を明らかにすることである。

地域活性化がいわれるようになって久しい。とくに中山間地域や離島でのそれは高度経済成長期から言葉は違うが、全国的な問題となっていた。それ以降、活性化のための様々な施策・方法が採られ、なかには成果をあげている地域もあるが、総じて問題解決には至らず今日まで活性化は地域、政治、行政にとって依然として大きな問題である。

そのような中、近年、アートを採り入れた地域活性化が注目されている。その先駆的存在として「大地の芸術祭」がある。「大地の芸術祭」とは、「人間は自然に内包される」を理念に、過疎化・高齢化の進む中山間地域である新潟県越後妻有地域（十日町市・津南町）で3年に一度行われる世界でも有数の大規模な国際芸術祭である。越後妻有地域約760km²の広大な土地を美術館に見立て、アーティストと地域住民とが協働し地域に根ざした作品を制作、継続的な地域展望を拓く活動を目的とする芸術祭である。2000年に148作品で第1回が開催され、16.3万人の来場者があり、2009年の第4回開催では365作品、37.5万人の来場者があった。今では国内だけでなく、世界からも注目を集めている芸術祭となっており、今年が第5回の開催年にあたる。この「大地の芸術祭」以降、全国各地で様々なアートによる地域活性化手法が採り入れられ、

香川県内でも小豆島、栗島などで行われている。

瀬戸内国際芸術祭は「海の復権」をテーマに「大地の芸術祭」と同じプロデューサー、ディレクターで行われ、その趣旨もほぼ同様である。⁽¹⁾同芸術祭は、過疎化・高齢化が進んだ瀬戸内の島々（小豆島、直島、豊島、女木島、男木島、大島、犬島、高松港周辺）を中心に2010年7月19日～10月31日の105日間で行われた。この間の訪問客は予想を3倍も上回る93万人にも上り、芸術祭実行委員会では1億円の収益があったという。本研究の対象となる豊島では17.5万人の集客があった。芸術祭は豊島に新たな動きをもたらしたといえる。

このように数値でみる限り、成功を取めた芸術祭であるが、その舞台となった地域に暮らす住民が芸術祭をどう受けとめたのか、地域住民にとって芸術祭はどのような意義があったのかについての研究は意外にも非常に少ない。「大地の芸術祭」については勝村（松本）他 [2008]、瀬戸内国際芸術祭については室井 [2012] がある程度である。アートを取り入れた地域活性化が全国的に展開されている中で、現状の研究蓄積ではその利点、問題点などまだまだ明らかになっていない部分が多く、このままでは活性化手法の効果の検証が難しいと考えられる。

そこで、本研究では、瀬戸内国際芸術祭2010が行われた豊島に住む島民を対象に、芸術祭の意義を明らかにすることを課題とする。その際、これまでの先行研究がアンケート調査によって研究対象を広くとらえてきたのに対して、本研究では豊島の1地区を対象を絞り、その地区住民全員を対象に、丹念な聞き取りによって調査を行う。これは、当地区に80歳を超える高齢者が数多く住むことが予想され、そのような高齢者ではアンケートによる自答式での調査は難しいと考えられること、研究蓄積を厚くするためにも地区住民全員を対象とした深掘りの調査が必要だと考えられることによる。

論文の構成は、1で先ず分析の評価軸を定め、2で調査地域の概要を説明し、

(1) 総合プロデューサーは福武総一郎氏（株式会社ベネッセコーポレーション会長）、ディレクターは北川フラム氏（株式会社アートフロントギャラリー代表取締役、女子美術大学教授）である。なお、正式名称は瀬戸内国際芸術祭2010「アートと海を巡る百日間の冒険」である。

3・4で聞き取り調査の方法、調査結果を明らかにする。最後に、評価軸に沿って芸術祭の地域住民にとっての意義を明らかにする。

1. 芸術祭の評価軸

芸術祭を評価するには当然評価軸が必要である。先行研究によると、瀬戸内国際芸術祭の舞台となった各島で住民を対象にアンケート調査を行った室井は、①芸術作品展としての評価、②地域づくり事業としての評価、③観光事業としての経済的評価の3つの軸を置いている⁽²⁾。その上で室井は「①と②に関する事業評価は必ずしも十分に行われたとはいえない。本稿はこのうち特に②(地域づくり事業)の観点に立って、開催地となった島の住民の立場から芸術祭の事後評価を行おうとするものである⁽³⁾」と述べ、②(地域づくり事業)について丹念な分析を行っている。

本稿でも地域づくり事業に焦点をあてて分析を行っていく。アートが離島という過疎化・高齢化の深刻な地域の活性化、地域づくりにどのような意味を持っているのかを地域住民の視点から明らかにすることが本研究の課題だからである。また、瀬戸内国際芸術祭のねらいが「島のお年寄りたちの元気を再生する機会を作り出し」、さらには「次代を担う若者や子どもたちも含めた地域の人々と交流し協働することで、瀬戸内の未来を拓く大きな原動力⁽⁴⁾」となることであることも、地域づくり事業に焦点をあてる理由である。

また、室井の明らかにした知見は多くのものがあるが、本研究との関係で地域づくり事業としての評価を中心にとくに重要なものを挙げると、それは以下のようなものである⁽⁵⁾。

- ①活気・にぎわい創出では大きな成果があった。
- ②経済効果の有無が芸術祭の評価に与えている影響は限定的
- ③住民の芸術祭への関与が「芸術祭が島に好ましい変化をもたらした」規定力となっている。

(2) 室井 [2012], pp. 1-5 を参照。

(3) 室井 [2012], p. 5 を参照。

- ④住民の対外的な交流も「芸術祭が島に好ましい変化をもたらした」規定力となっている。
- ⑤交流はこえび隊、アーティストとの交流が観光客とのそれよりも重要であった。
- ⑥住民とこえび隊との交流は今でも続いていて、それが最も大きな成果ともいえる。

本研究における分析では上記の室井の明らかにした知見をも確認していきたい。

なお、分析対象として豊島を選んだ理由、さらには豊島の中でもK地区を選

- (4) 瀬戸内国際芸術祭 HP にはコンセプトとして、以下のように記載されている。

「固有の場所で展開されるアートや建築は、その場所へ人を惹きつける力を持ちます。そして、瀬戸内の持つ美しい景観と自然の中で、それらは、人間が自然に関わるための「技術」となります。

ART SETOUCHI の活動は、舞台となるそれぞれの島で育まれてきた固有の民俗を活かし、島々で営まれてきた生活、歴史に焦点を当て、アートが関わることによって住民、特に島のお年寄りたちの元気を再生する機会を作り出していきます。

活動の過程では、日本全国・世界各国から世代・地域・ジャンルを超えた人々が集い、次代を担う若者や子どもたちも含めた地域の人々と交流し協働することで、瀬戸内の未来を拓く大きな原動力となります。

そして、この地が世界の叡智が集う場所となり、島々にできた新しい縁が、島と瀬戸内海再生の機会を生み出していくでしょう。」(<http://setouchi-artfest.jp/about/concept/>を参照)

- (5) 室井 [2012] を参照。なお、室井は瀬戸内国際芸術祭の住民評価にあたって、先行研究として「大地の芸術祭」の舞台となった新潟県越後妻有地方の住民を対象とした調査研究(勝村(松本)他 [2008])を参考にし、以下の知見を得られたと述べている。この知見も重要なので以下に挙げておく。

「1. アートプロジェクトに対する住民評価は、①芸術作品に関する評価と、②地域づくりに関する評価、を区別して分析する必要がある。

2. ①に関しては、住民の現代アートに対する評価は低いものではないが、現代アートが、製作者やイベント主催者の思惑とは裏腹に、サイトスペシフィック(特定地域の歴史や伝統を反映させた)のものであるとの認識はあまりもたれていなかった。

3. 現代アートへの好感度は、職業(専門職)や学歴(高学歴)といった属性的要因とは無関係であり、それよりもプロジェクトに関する事前説明が十分に行われていたか否かによって規定される部分が大きかった。

4. ②に関しては、「アートプロジェクトが地域に好ましい変化をもたらした」と答えた人は3割に満たず、地域づくり事業としての評価は高いものではなかった。

5. アートプロジェクトが地域社会に与えた影響という点では、来場者のインパクトよりも、住民とボランティアやアーティストとの間で行われた交流やそれによって築かれた関係性が大きな意味を持った。」(室井 [2012], pp. 8-9 を参照)

んだ理由であるが、豊島については、芸術祭の中でも作品数が最も多く、島々の中で一番力を入れられた島であり、実際に来場者数も17.5万人と直島に次いで多く、芸術祭以前と比べて最も集客数が多くなった島だからである。中でもK地区では7作品と多くの作品が展示され、また、東京のホテルのシェフと地区の婦人たちとで郷土料理や地元産食材を生かした食事を提供したレストランも開店され、芸術祭期間中は多くの観光客でにぎわった。このため、芸術祭後の住民の評価を調べるには豊島のK地区が最も顕著にその効果が現れていると考えた。

2. 調査地の概要

豊島は小豆島と直島の中間、岡山県玉野市のほぼ真東に位置する。面積は14.6km²と瀬戸内海の島の中では中程度の大きさで、行政上は香川県小豆郡土庄町に属する一部離島である。人口は2011年現在で約1,000人余りであり、島は家浦(岡地区、浜地区、硯地区)、唐櫃(岡地区、浜地区)、甲生の3つ(6つ)の地区に分かれ、人口比はだいたい家浦：唐櫃：甲生で6：3：1である。他の離島と同じように過疎化と高齢化(高齢化率43.5%)⁽⁶⁾は深刻化しており、1970年には約2,500人いた人口も今では当時の40%ほどである。島内には高校がなく、島から高校に通うには高速艇を使って高松へ行くか、フェリーで小豆島に行くかである。さらに、雇用不足も人口流出の原因の一つである。

豊島は産業廃棄物不法投棄事件で全国的にもその存在を知られるようになったが、もともとは農業・漁業と石材産業といった地場産業が中心の島であった。離島としては珍しく水が豊富で、傾斜地を利用した棚田の美しさは有名で、かつては米を自給した上で島外にも販出していた。酪農も盛んであった。今でも、稲作と果樹栽培が主に行われているが、米は自給がほとんどで高齢化の進行とともに棚田を中心に耕作放棄地もかなり増加している。一方、豊島はその温暖な気候から果樹栽培に適しており、ミカンやオリーブ、イチゴ、レ

(6) 2005年現在。

モンなどが栽培されている。とくにイチゴでは、I・Uターンの30歳代・40歳代の農家も精力的に生産を行っている。その他の産業としては漁業、土建業がある程度だが、それらも衰退傾向にある。

今回の調査対象地域となったK地区は、標高100m以上の島のほぼ中腹部に位置する集村であり、細く入り組んだ道沿いに家が集まって構成されている⁽⁷⁾。農業では傾斜地を利用した稲作、ミカンなどの果樹栽培が行われており、漁業は行われていない。集落の中心部に雑貨屋が2軒立地する農村である。

この地区は古い家も多く残っており、また神社や棚田、湧水、ため池などの田園景観も残っているためか、芸術祭では多くの作品が神社やため池、使われなくなった民家に展示された。

3. 聞き取り調査について

聞き取り調査は2010年12月5日、6日、11日、17日、2011年1月13日の5日間で行った。まず、11月下旬にK地区全戸の郵便受けに調査の趣旨、日程を記した調査協力の依頼文を配布した⁽⁸⁾。その後、12月の上記4日間は10時頃から15時頃まで調査を行った。調査では地域活性化を学ぶ学生約10人と筆者が2人1組となって戸別訪問を行い、対面時に改めて聞き取り調査の趣旨を説明し、調査協力の依頼を行った。そこで拒否されれば調査は行わず、受諾した住民(15歳以上の住民)に対して、聞き取り調査を行った。原則として、調査員が調査票に聞き取り内容を書き込んだが、数人については例外的に直接記入してもらった。日中は農作業等で留守の場合も多く、一日に同じ家を数回訪問することが普通であった。また、不在の家には調査を行った4日間のうち3～4日は訪問している。それでも調査ができなかった世帯について、1月に事前に電話で連絡し、18時から20時にかけて戸別訪問をして調査を行った。入院中などを除くとほぼ集落すべての世帯を訪問した。

(7) 塊となった集落の中心よりさらに高いところにも家があり、地区の一部になっている。

(8) 事前の調査計画段階で集落の自治会長には趣旨を説明し、調査について理解を得ていた。

聞き取り対象となったのは15歳以上(中学校卒業以上)の集落到住む人すべてである。K地区は全部で169人、78世帯(2010年8月現在)あり、聞き取りできたのは全部で88人、59世帯である(52%, 76%)。聞き取りできなかった主な理由として、インタビューを拒否されたこと、住民票では住んでいることになっているが実際は住んでいなかったこと、日を替えて4~5回訪問しても入院中などで留守であったことなどがあげられる。集落の事情をよく知る住民に尋ねたところ、これらの人には80歳以上の高齢者が多い。また、以前住んでいたが今は島外に住み、月に何度か帰ってくる人(2人)や瀬戸内国際芸術祭以来住み始めた人(1人)にも尋ねている。ただし、計3人と少数である。⁽⁹⁾

4. 調査結果

(1) 回答者について

まず、回答者の属性からみていく。性別では、男性が39人(44.3%)、女性が49人(55.7%)と女性が多い。次に年齢別では、第1表によると、60代が33.0%と最も多く、次いで70代(19.3%)、80代以上(18.2%)となっており、70代以上で全体の4割弱、60代以上になると7割を占める。インタビューを拒否された人は高齢者が多く、その人たちを含めて考えても高齢化が非常に進んでいることがわかる。50代はかろうじて17.0%いるが、40代からは非常に少なくなり、10代・20代はそれぞれわずか1.1%、30代が2.3%、40代が6.8%と40代までで全体の1割強しかいない。⁽¹⁰⁾今後の一層の過疎化、高齢化が心配される。

以上のような高齢化を反映して職業構成では(第2表参照)、農業(29.5%)

(9) ところで、筆者は豊島を研究対象地として5年来通い続けており、今回の聞き取り調査の中には知人も何人かいた。そのことは調査をスムーズに行えた要因の1つになっていると考えられるが、同時に回答者の回答に何らかのバイアスがかかる可能性も捨てきれないことは認めざるを得ない。しかし、できる限り中立な立場で聞き取りをすることに努めたし、その知人も筆者を意識して回答を変えることがないような信頼関係をこれまで築いてきたと考えている。

(10) ただし、仕事や高校の部活動のため聞き取りできなかった10代~30代の人たちも複数いた。

第1表 回答者の年齢構成

年 齢	人数(人)	比率(%)
20歳未満	1	1.1
20歳代	1	1.1
30歳代	2	2.3
40歳代	6	6.8
50歳代	15	17.0
60歳代	29	33.0
70歳代	17	19.3
80歳以上	16	18.2
不明	1	1.1
計	88	100.0

に次いで、無職（28.4%）が多い。この両者で全体の6割弱を占める。また、団体職員が6.8%と福祉関係団体に勤める職員が比較的多いのも特徴である。他には土建業（5.7%）、自営業（5.7%）などがある。

回答者の豊島での居住歴をみると、全体の72%が豊島出身であり、そのうちの38%が生まれてからずっと豊島で暮らしており、残り（62%）が進学や就職のために一度島外に出た後再び戻ってきたUターン者である。就職先は大阪府が最も多く、その他には岡山県、香川県、大阪以外の近畿地方各府県があげられる。男女比では、豊島出身者の54%、Uターンでは56%が男性である。全体の男女比では女性の比率が高い（56%）ことを考慮すると、男性が相対的に多いことがわかる。

一方、島外で生まれ、後に豊島に来たIターン者は全体の26%であり、そのうちの78%は女性である。Iターンした理由としては、結婚した後、夫とともに豊島に来たというのが最も多い。また、高齢者（80歳前後かそれ以上）には子どもの時、戦争の疎開先が豊島でそのまま住んでいるという人も複数存在する。

次に世帯構成をみる（第3表参照）。今回の調査では59世帯に聞き取り調査を行うことができたが、そのうち2人世帯（ほとんどが夫婦2人世帯）が全体

第2表 回答者の職業構成

職 業	人数(人)	比率(%)
農業	26	29.5
漁業	0	0.0
団体職員	6	6.8
自営業	5	5.7
土建業	5	5.7
会社員	4	4.5
飲食業	0	0.0
無職	25	28.4
その他	14	15.9
不明	3	3.4
計	88	100.0

の44.1%を占めて最も多い。次いで1人世帯（独居世帯）が28.8%であり、この両者で73%と大部分を占める。この両者計43世帯のうち世帯主が60歳未満は8世帯のみであり、大部分は高齢者世帯であることがわかる。その一方で、4人以上の世帯は11世帯（18.7%）と少ない。このうち世帯主が60歳未満は6世帯であり、子どもや親と同居している世帯が多いことがわかる。3世代同居世帯は7世帯いる。

また、島外への外出頻度については（第4表参照）、月1回未満が全体の14.7%であり、これに月1回程度を含めると44.2%まで増える。高齢者が多く、島外への外出が少ない。月1回未満の外出の場合、その目的はほとんどが病院である。一方、月2回以上島外に出る人はその目的は大部分が仕事や買物である。豊島では小売の店も品数も限られているため、買物には島外に出かける人も多い。⁽¹¹⁾

(11) 他出した家族と月1回以上会っている人が68%と多くを占めている。比較的頻繁に会っていることがわかる。

第3表 回答者の世帯構成

世帯構成	全 体		うち世帯主60歳未満	
	人数(人)	比率(%)	人数(人)	比率(%)
1人世帯	17	28.8	4	23.5
2人世帯	26	44.1	4	23.5
3人世帯	5	8.5	3	17.6
4人世帯	6	10.2	4	23.5
5人世帯	2	3.4	0	0.0
6人以上世帯	3	5.1	2	11.8
計	59	100.0	17	100.0

第4表 回答者の島外への外出頻度

類 度	人数(人)	比率(%)
なし	4	4.5
月1回未満	9	10.2
月1回程度	26	29.5
月1回以上	21	23.9
週1回以上	19	21.6
ほぼ毎日	7	8.0
不明	2	2.3
計	88	100.0

(2) 聞き取り内容について

① 芸術祭開催前の評価

では、以下、聞き取り内容について具体的にみていこう。

先ず、芸術祭の始まる前についてである。事前の説明会・広報活動については、「あった」が85.2%、「なかった」が11.4%となっている。説明会・広報活動について芸術祭実行委員会は実際に行っているのに、何らかの理由で説明会等の情報が届かなかったのであろう。

芸術祭が始まる前に外部から人（作家、こえび隊、客）が入ってくることに
 ついての抵抗感については（第5表参照）、「全くなかった」が43.2%、「あま

りなかった」が37.5%と、両者で80%を超えている。鳥ということもあって、抵抗感が予想されたが意外な結果であった。ただし、その一方で抵抗感があったという人（「非常にあった」・「まああった」）も13.6%いた。

芸術祭の事前期待度については（第6表参照）、5段階評価の平均で3.50、回答項目でみると「まああった」が43.2%、「非常にあった」が15.9%であり、両者で60%の人が期待していたことがわかる。一方で、「あまりなかった」・「全くなかった」を合わせると20%以上の人が期待していなかった。ここでも、期待していなかった人が2割以上いたものの、初回の芸術祭に対して鳥での期待度が比較的大きかったことがわかる。

また、事前期待度について5段階評価での評価の理由を自由回答で尋ねた。3人以上から同様の回答のあったものを表出した（第7表参照）。期待度の高かった回答では、「人が来て活性化・にぎわい」が全体の28.4%と最も多い。次いで「アートへの期待・好奇心」（8.0%）、「人が来る」（5.7%）の順で多い。芸術祭により島に訪問客が増加し、それにより島が活気づいたり、経済効果があることを期待していたことがわかる。

一方、期待していなかったという自由回答では「アートがわからない・身近ではない・イメージがない」（12.5%）が最も多い。次いで「人は来ない」（8.0%）が多い。アートがわからない、イメージがないことから期待度が下がって

第5表 島外から人が入ってくることの抵抗感

5段階評価	人数(人)	比率(%)
1. 全くなかった	38	43.2
2. あまりなかった	33	37.5
3. どちらともいえない	4	4.5
4. まああった	9	10.2
5. 非常にあった	3	3.4
不明	1	1.1
平均	1.92	

注：平均は5段階評価で尋ねた平均。

第6表 芸術祭の事前期待度

5段階評価	人数(人)	比率(%)
1. 全くなかった	5	5.7
2. あまりなかった	13	14.8
3. どちらともいえない	16	18.2
4. まああった	38	43.2
5. 非常にあった	14	15.9
不明	2	2.3
平均	3.50	

注：平均は5段階評価で尋ねた平均。

第7表 芸術祭の事前期待度の理由（自由回答）

評価	理由	人数(人)	比率(%)
プラス評価	人が来て活性化・にぎわい	25	28.4
	アートへの期待・好奇心	7	8.0
	人が来る	5	5.7
	豊島の良さを知ってほしい	3	3.4
マイナス評価	アートがわからない・身近ではない・イメージがない	11	12.5
	人は来ない	7	8.0
	期待していない	4	4.5

注：1) 比率は回答者88人に占める比率。

2) 自由回答で3人以上同様の回答があった項目のみ表出。

る。また、人によって芸術祭の集客効果が正反対（「人が来る」と「人は来ない」）になるのは興味深い。

② 芸術祭との関わり

次に芸術祭との関わりについてみていこう。まず、芸術祭の作品については、「見た」が90.9%とほとんどの人が作品を見ていることがわかる。

見た作品の評価については、5段階評価の平均で3.90、回答項目では「まあ良かった」が53.4%と半分以上を占め、「非常に良かった」を合わせると

68.2%の人が良かったと評価している。それに対して「あまり良くなかった」と答えた人は2.3%と極めて少ない（「全く良くなかった」と答えた人は0人）。多くの住民が作品を評価していることがわかる。

芸術祭との実際の関わりについては（第8表参照）、「あった」が65.9%と2/3を占めており、大部分の人が関わっていた。関わった内容については、「その他」（37.5%）を除くと「仕事（飲食店・物販・その他）」（19.3%）、「土地・家屋・資材の貸与・提供」（15.9%）の順で高く、仕事上での関わりや作品制作・展示での関わりが多い。一方で、「作品管理」は1.1%のみであり、作品管理まで関わった人は極めて少ない。

関わりを持った理由について自由回答で答えてもらったところ、「たまたま話があった」、「自治会の役員をされていて(立場上)」など偶然性の強いものから、「島キッチンで働いた」、「島キッチンへ野菜を提供した」といった地域内で芸術祭をきっかけに起きた動きからや、「こえび隊の情熱・島キッチンのシェフ

第8表 芸術祭との関わり

	人数(人)	比率(%)
なし	28	31.8
あった	58	65.9
うち①	17	19.3
うち②	14	15.9
うち③	10	11.4
うち④	8	9.1
うち⑤	1	1.1
うち⑥	33	37.5
不明	2	2.3
計	88	100.0

注：①～⑥の内容は以下の通り。

- ①仕事（飲食店・物販・その他）
- ②土地・家屋・資材の貸与・提供
- ③訪問客への作品案内
- ④作品づくりの協力
- ⑤作品管理
- ⑥その他

の情熱に刺激を受け頑張ろうと思った」,「住民運動の延長。お世話になった全国の人にその時の恩返しをするため、私にできることを返したいと思った」といった主体的に問題意識を引き寄せて関わった人など様々である。一方、関わりを持たなかった理由については、「年齢（高齢）のため」,「足が悪いため」といった高齢と、「仕事で忙しかった」といった仕事上の理由が多かった。

また、島外の人との交流については、「あった」とする人が、アーティストとの交流で58.0%、こえび隊で61.4%と6割前後の高さだったのに対して、訪問客との交流は81.8%と非常に多くの住民に交流があった。ただし、交流の深さはアーティスト、こえびと訪問客とは異なる。客の場合はあいさつや道案内をした程度の交流が主であるのに対して、作品制作のために滞在したアーティスト、こえびとの場合は、上述したように何度も顔を合わせ、時にはアーティストの作品に対する思いを直接聞いて感銘を受けたりなど深い交流をしている場合が多い。こえびに対しても、彼らの真摯な取り組みに感心して住民も自ら行動に移すなどその後の生活面にまで影響を及ぼしている場合もある。

③ 芸術祭で変化したこと

芸術祭で変化したことについて尋ねた10項目については（第9表参照）、5段階評価の平均で「地域内での女性の活躍の機会が増えた」が3.99と最も高く、次いで「地域での話題が多くなった」3.95,「地域に活気が出た」3.89の評価が高い。選択回答でもこれらの項目は「そう思う」（「非常にそう思う」,「まあそう思う」の計）がいずれも70%を超え、評価が非常に高い。総合的な評価を意味する「全体的にみて島全体がよくなった」も平均が3.76とかなり高く、「そう思う」も65%と大部分の人が評価している。女性の活躍を中心に地域に活気が出たと多くの人が評価していることがわかる。

一方で、「景観・風景が悪くなった」(1.55),「生活環境が悪くなった」(1.99),「地域内でのもめごとが多くなった」(平均2.16)は平均が低く、選択回答でも「そう思わない」（「全くそう思わない」,「あまりそう思わない」の計）がいずれも70%前後かそれ以上であり、とくに「景観・風景が悪くなった」につ

第9表 芸術祭で変化したこと

項 目	5段階評価	1	2	3	4	5	不明	計
地域内での女性の活躍の機会が増えた	人数(人)	0	9	9	44	26	0	88
平均3.99	比率(%)	0.0	10.2	10.2	50.0	29.5	0.0	100.0
地域での話題が多くなった	人数(人)	0	12	10	36	30	0	88
平均3.95	比率(%)	0.0	13.6	11.4	40.9	34.1	0.0	100.0
地域に活気が出た	人数(人)	2	9	13	37	27	0	88
平均3.89	比率(%)	2.3	10.2	14.8	42.0	30.7	0.0	100.0
地域での寄合の回数が増えた	人数(人)	5	21	13	34	15	0	88
平均3.38	比率(%)	5.7	23.9	14.8	38.6	17.0	0.0	100.0
島で仕事が増えた	人数(人)	9	15	16	36	11	1	88
平均3.29	比率(%)	10.2	17.0	18.2	40.9	12.5	1.1	100.0
地域内での高齢者の活躍の機会が増えた	人数(人)	6	25	19	30	8	0	88
平均3.10	比率(%)	6.8	28.4	21.6	34.1	9.1	0.0	100.0
地域内でのめもごとが多くなった	人数(人)	32	29	10	15	2	0	88
平均2.16	比率(%)	36.4	33.0	11.4	17.0	2.3	0.0	100.0
生活環境が悪くなった	人数(人)	42	24	4	17	1	0	88
平均1.99	比率(%)	47.7	27.3	4.5	19.3	1.1	0.0	100.0
景観・風景が悪くなった	人数(人)	52	29	4	1	2	0	88
平均1.55	比率(%)	59.1	33.0	4.5	1.1	2.3	0.0	100.0
全体的にみて島全体がよくなった	人数(人)	2	6	20	39	18	3	88
平均3.76	比率(%)	2.3	6.8	22.7	44.3	20.5	3.4	100.0

注：1) 平均は5段階評価の平均。

2) 5段階評価については以下の通り。

- 1 全くそう思わない
- 2 あまりそう思わない
- 3 どちらともいえない
- 4 まあそう思う
- 5 非常にそう思う

いては「そう思わない」が92.0%とほとんどの人が芸術作品による豊島の景観変化に否定的ではないことがわかる。景観、生活環境面においても芸術祭が大部分の島民に好意的に評価されていることが確認できる。

ただし、「地域内での高齢者（65歳以上）の活躍の機会が増えた」（平均

(12) ただし、生活環境については20.5%の人が「まあそう思う」と答えている。

3.10)、「島で仕事が増えた」(3.29)については、「どちらともいえない」に近い平均値で、選択回答では「まあそう思う」の回答が最も多いものの回答は分散している。この2つについては住民の間でも見解の相違があるといえる。

「地域内での高齢者(65歳以上)の活躍の機会が増えた」について、年齢別でクロス集計したところ、65歳以上層では平均値が2.68であったのに対して、65歳未満層では3.46であり、65歳未満層のほうが有意に高かった⁽¹³⁾。65歳以上、とくに80歳以上になると、高齢のため芸術祭に何らかの関わりを持つことが難しくなる人も増えるため、「高齢者の活躍の機会が増えた」と実感できないことが考えられる。一方、「島で仕事が増えた」については、年齢別では有意差はなかったが、性別では有意差があり、女性の評価が高かった⁽¹⁴⁾。この地区では東京のホテルのシェフと地区の婦人たちとで郷土料理や地元産食材を生かした食事を提供したレストランが開店し、そこで地元の女性が何人も働いていることが影響していると考えられる。

④ 満足度

芸術祭の事後満足度については(第10表参照)、5段階評価の平均で3.95、「まあ満足」が53.4%、「非常に満足」が22.7%であり、両者で3/4超の人が満足していることがわかる。一方で、「やや不満」・「非常に不満」を合わせて3.4%の人が不満であった。不満を持った人の意見を聞く必要があるが、芸術祭の満足度は非常に高かったといえる。

また、先にみた事前期待度(平均3.50)よりも事後満足度のほうが評価が高く、期待をかなり上回ったことがわかる。

芸術祭の良かった点についての自由回答をみる(第11表参照)。回答の多かったものとしては「人(若者)が来た」(29.5%)、「活性化した・活気が出た・にぎやかになった」(22.7%)、「交流できた」(22.7%)があげられる。以下、具体的に回答をいくつかみてみよう。

(13) 1%水準で有意差があった。

(14) 平均値では男性2.82、女性3.65であり、1%水準で有意差があった。

第10表 芸術祭の事後満足度

5段階評価	人数(人)	比率(%)
1. 非常に不満	1	1.1
2. やや不満	2	2.3
3. どちらともいえない	17	19.3
4. まあ満足	47	53.4
5. 非常に満足	20	22.7
不明	1	1.1
平均	3.95	

注：平均は5段階評価で尋ねた平均。

「人が来てくれて、活気がでた。知らない人と話をするのができた。魚をおいしく食べてもらえた。」

「人との触れ合い。高齢者の活気。働く場所ができ、何かやらなきゃと思わせた。」

「島キッチンに行くと、必ず人がいて、会話ができるため楽しかった。」

「豊島にも都会や外国などいろいろな所から人が来て良かった。(略) 美術館前の道が凄くきれいになった。アートが入ってくることで豊島が活性化された。」

人(若者)が豊島に来て、島民と交流し、その結果として島に活気が出て、島民も元気になったということである。芸術祭の効果として高く評価できる。また、「島の良さを再認識できた」(5.7%)も多くはないが、島外からの訪問客の指摘によって島民が改めて島の良さに気付かされたという意味で、芸術祭の地域へ与える積極的な意義といえる。

第11表 芸術祭の良かった点・悪かった点（自由回答）

評 価	理 由	人数(人)	比率(%)
良かった点	人（若者）が来た	26	29.5
	活性化した・活気が出た・にぎやかになった	20	22.7
	交流できた	20	22.7
	景観がよくなった	9	10.2
	客のマナーが良かった	8	9.1
	アートにふれた	7	8.0
	鳥の高齢者に良かった	6	6.8
	鳥の良さを再認識できた	5	5.7
	経済効果があった	3	3.4
	鳥の良さを外の人に伝えられた	3	3.4
悪かった点	自転車・歩行者が道をふさいだ	16	18.2
	船：便の悪さ、乗れなかった	13	14.8
	バス：便の悪さ、騒音	10	11.4
	騒音（イベント、音楽など）	7	8.0
	ゴミが増えた	5	5.7
	客のマナーが悪かった	5	5.7
	経済効果がなかった	4	4.5
	忙しかった・せわしかった	4	4.5
	準備不足だった	3	3.4
	治安・カギをかけるようになった	3	3.4
トイレ不足・使用方法に問題があった	3	3.4	

注：1）比率は回答者88人に占める比率。

2）自由回答で3人以上同様の回答があった項目のみ表出。

「自分の豊島を誇れると再認識できた。」

「普段住んでいると、鳥の良い所を良いところだと実感できないが、芸術祭は、外部の人が良さを伝えてくれた。」

「ボロの家でも良くなっていった。人と会って話げできた。棚田復活、

道路の木を伐った。芸術祭で豊島がこんなにきれいだと思わなかった。」

さらに、芸術祭に関わって棚田の法面整備や花の植栽などにより、「景観がよくなった」(10.2%)という指摘があったことも注目してよい。島民は、以前は豊島の代名詞でもあったが、近年では耕作放棄され荒れ放題の棚田に心を痛めていたことがわかる。

一方、芸術祭の悪かった点についても自由回答で尋ねた(第11表参照)。回答の多かったものとしては、「自転車・歩行者が道をふさいだ」(18.2%)、「船：便の悪さ、乗れなかった」(14.8%)、「バス：便の悪さ、騒音」(11.4%)、「騒音(イベント、音楽など)」(8.0%)があげられる。訪問客の交通マナーと交通の便の悪さなどのインフラ関係、イベントでの騒音などであり、これらについては注意喚起や事前の話し合いなど今後芸術祭が行われる前には何らかの対処策が必要であろう。また、それほど多くはないが、「忙しかった・せわしかった」(4.5%)、「治安・カギをかけるようになった」(3.4%)といった指摘もあった。島での生活習慣が外部から人が大勢来ることによって変化を余儀なくされたことがわかる。さらに、ごく少数であるが、「関係者・上層部だけで物事が決まっていた」、「(島の人間の責任であるが)島にお金が落ちなかった」といった指摘もあった。

⑤ 芸術祭によって得られたもの

芸術祭によって得られたものについて(第12表参照)、島が得られたもの、自分が得られたものそれぞれについて自由回答で尋ねた。まず、島が得られたものについて、「元気・活気・明るくなった・活性化」という回答が36.4%と最も多かった。ここでも島の活性化については多くの人が認めていることがわかる。

次いで「人・若い人が大勢来た」(12.5%)、「島を知ってもらえた」(11.4%)、「経済効果があった」(10.2%)があげられる。人が大勢来訪する、交流することによって島に活気が出る、元気になる、さらには経済的にも活性化するとい

第12表 芸術祭によって得られたもの（自由回答）

評 価	理 由	人数(人)	比率(%)
島が 得られた もの	元気・活気・明るくなった・活性化	32	36.4
	人・若い人が大勢来た	11	12.5
	島を知ってもらえた	10	11.4
	経済効果があった	9	10.2
	交流できた	8	9.1
	一部の人・店には良かった	8	9.1
	島のイメージが変わった・良くなった	6	6.8
	バス・船の便が良くなった	3	3.4
	芸術に関心を持つようになった	3	3.4
	なし	6	6.8
自分が 得られた もの	交流できた・話げできた	20	22.7
	元気が出た	9	10.2
	芸術に興味を持つようになった	5	5.7
	作品を見ることができた	4	4.5
	考え方が変わった・意識が高まった	3	3.4
	気づきがあった・誇りが持てるようになった	3	3.4
	なし	22	25.0

注：1）比率は回答者88人に占める比率。

2）自由回答で3人以上同様の回答があった項目のみ表出。

う因果関係が考えられる。

「人と接することで島が元気になった。」

「人が来てくれてにぎやかになった。」

「地域が元気になった。利益が出た人も中にはいる。人が出入りしただけでも良かった。さびしい感じだったので活気が出た。」

「若い人が多く島に入ってくれたことで、活性化につながった。」

また、訪問客に豊島の存在を知ってもらえたことについては、同表の「島のイメージが変わった・良くなった」(6.8%)とあわせて考えると、⁽¹⁵⁾「産廃の島」, 「ゴミの島」というかつての負のイメージが払拭されたり、あるいは何のイメージも持たずに来訪した訪問客に豊島という島の存在を知ってもらえたことを、島民が高く評価していることがわかる。

「若い人が沢山来てくれて、豊島のことを知ってくれた。」

「観光化されていない豊島の自然の良さをわかってもらえた。」

次に、自分が得られたものについて(第12表参照)、「なし」が25.0%と最も多かったが、次は「交流できた・話げできた」(22.7%)であった。

「にぎやかで人と話すこともできた。」

「人に会って話げできたこと。道を聞かれるだけでボケ防止。」

次いで「元気が出た」(10.2%)が多かった。訪問客が大勢来ることによって、島民との会話が生まれ、交流できたことを評価しており、その結果として元気が出たといえる。

「若い人を多く見て、元気になった。楽しかった。」

「若い人々との出会いで精神的に若くなった。島では貴重。」

(15) 「ゴミの島のイメージがなくなった」, 「産廃の島のイメージチェンジ」, 「島を見てもらうチャンス。ごみだらけの島じゃないというイメージを変えるチャンス」などの回答があった。

また、「芸術に興味を持つようになった」(5.7%)、「作品を見ることができた」(4.5%)も次いで多かった。芸術や作品に興味を持ち、評価していることも興味深い。芸術祭は島民にも好影響を与えている。

「芸術に興味を持てた。」

「元気になった。わくわくして元気が出た。もともとアートには興味なかったが、今は興味を持って調べたり、新聞を切り抜いたりしている。」

さらに、同表によると、指摘は多くはないが、「考え方が変わった・意識が高まった」(3.4%)、「気づきがあった・誇りが持てるようになった」(3.4%)などの深いレベルでの意識の変化があったこともわかる。得られるものがあつた島民は決して少なくなかったといえる。

「生き方、考え方の変化があつた。」

「自分自身が豊島内で気付かなかつたことに気付くきっかけとなつた。」

「島外の方との会話が增え、会話を重ねることで島に誇りが持てた。」

⑥ 今後の要望

今後も芸術祭を続けていってほしいかについては(第13表参照)、5段階評価の平均で4.17、「非常にそう思う」43.2%、「まあそう思う」36.4%であり、ここでも3/4以上の人が継続を望んでいることがわかる。しかも満足度と比べて「非常にそう思う」の回答が多くなっていることが特徴である。事前期待度、事後満足度、今後の要望(期待度)と平均値が上昇しており、島民の芸術祭に対する評価が実施前の期待度よりも実施後の満足度のほうが高く、満足度よりも今後の要望(期待度)のほうが高くなっており、改めて芸術祭が島民に

第13表 芸術祭を今後も続けていってほしいか

5段階評価	人数(人)	比率(%)
1. 全く思わない	2	2.3
2. あまり思わない	3	3.4
3. どちらともいえない	11	12.5
4. まあそう思う	32	36.4
5. 非常にそう思う	38	43.2
不明	2	2.3
平均	4.17	

注：平均は5段階評価で尋ねた平均。

高く評価されていることが確認できる。⁽¹⁶⁾

また、芸術祭との関わりや交流（アーティスト、こえび、客との交流）と満足度との関係についてもみた（第14表参照）。まず、芸術祭について事前の説明が「あった」・「なかった」で比べた場合、事前期待度、事後満足度については、「あった」の5段階評価での平均が「なかった」に比べて高かった。⁽¹⁷⁾次に、芸術祭に何らかの関わりが「あった」・「なかった」で比べた場合、事後満足度については「あった」の平均が「なかった」に比べて高かったが、それ以外では差がほとんどなかった。⁽¹⁸⁾さらに、交流が「あった」・「なかった」で比べた場合、事前期待度、事後満足度では「あった」の平均が「なかった」に比べて高かったが、今後の要望（期待度）については「なかった」の平均のほうが高かった。⁽¹⁹⁾

年齢別（65歳以上層と65歳未満層）に比べた場合（第14表参照）、事前期待度、今後の要望（期待度）は65歳以上層が65歳未満層よりも高く、事後満足度は逆に65歳未満層のほうが高かった。⁽²⁰⁾

(16) 事前期待度、事後満足度、今後の要望（期待度）との平均値の差を分散分析により検定したところ、明示は省略するが、いずれの2つの項目とも5%水準で有意差があった。

(17) ただし、平均値の差の検定では、いずれも有意差はなかった。一方、今後の要望（期待度）では有意差はないが、「なかった」のほうが高かった。

(18) 「あった」・「なかった」の事後満足度の平均値の差の検定では、有意差はなかった。

(19) 平均値の差の検定では、事前期待度のみ5%水準で有意差があった。

第14表 期待度・満足度・今後の要望について（5段階評価の平均値）

項目	有無	1.事前期待度	2.事後満足度	3.今後の要望(期待度)	備考(平均値の差の検定)		
事前の説明	あった	3.54	4.01	4.17	**	1と2, 1と3	
	なかった	3.50	3.70	4.30			
芸術祭への関わり	あった	3.48	4.06	4.19	**	1と2, 1と3	
	なかった	3.52	3.78	4.19	*	1と3, 2と3	
交流	あった	3.58	4.01	4.18	**	1と3	* 1と2
	なかった	2.71	3.43	4.29			
年齢別	65歳以上	3.75	3.93	4.30	**	1と3, 2と3	
	65歳未満	3.26	4.02	4.10	**	1と2, 1と3	
全体	—	3.51	3.96	4.19	**	1と2, 1と3	* 2と3

**：1%水準で有意，*：5%水準で有意

ここでもう1つ重要なことは、事前の説明、芸術祭との関わり、交流の「あった」・「なかった」、年齢別のいずれも、事前期待度、事後満足度、今後の要望(期待度)の平均値がそれぞれ事前期待度<事後満足度<今後の要望(期待度)の順で高かったことである(第14表参照)。芸術祭の満足度は、事前の期待度よりも高く、今後の要望(期待度)はその満足度よりも高かったのであり、これは芸術祭が島民の多くに受け入れられていることを示している。

また、今後の芸術祭への要望についても自由回答で尋ねた(第15表参照)。回答の多かったものとしては、「船：便の悪さ、乗れないことの改善」(14.8%)、「島民も関わる」(14.8%)、「アート関係(作品数・設置場所など)」(10.2%)があげられる。船やバスについては、上にみた芸術祭の悪かった点の改善点として出されたと考えられる。同数であった「島民も関わる」は芸術祭に島民がより積極的に関わるべきだというものである。この回答が多かったことは注目してよい。例えば、以下のような回答があった。

(20) 平均値の差の検定では、事前期待度のみ5%水準で有意差があった。

第15表 今後の芸術祭への要望（自由回答）

理 由	人数(人)	比率(%)
船：便の悪さ、乗れないことの改善	13	14.8
島民も関わる	13	14.8
アート関係（作品数・設置場所など）	9	10.2
バス：便の悪さ	6	6.8
景観の維持・保全	6	6.8
自然の維持・保全	6	6.8
飲食店を増やす	5	5.7
道の案内をわかりやすく	4	4.5
客にゆとりを持ってきてもらう	4	4.5
もっと来てほしい	3	3.4
食の重視	3	3.4

注：1）比率は回答者88人に占める比率。

2）自由回答で3人以上同様の回答があった項目のみ表出。

「島は中・外から見る角度が必要だからもっとゆっくり（7つの島を1週間かけて）見てほしい。地域の人もっと携わり，上手に関わることで更にいいアイデア・プランを出していくべき。」

「開催者側と地元の間がもっと密接になって作品や，周りの環境を管理すべき。」

「関係者・上層部だけで物事が決まっていた。島キッチンで使う野菜をあらかじめ島民全体にお願いして作ってもらうべき。狭い島なので，声をかけてもらったら，皆嬉しいと思うはず。もっと多くの人を関わらせてほしい。」

このように島民も主体的に関わっていくべきだと島民自身が考えているのである。

さらに、「アート関係（作品数・設置場所など）」では「もっと作品があった

ほうがよい]、「各地域に均等に作品があったほうがよい」などの指摘があげられる。芸術祭を好意的に評価した上での要望であることがわかる。⁽²¹⁾

終. 結びにかえて

ここまで聞き取り調査をもとに分析を行ってきた。本研究で明らかになったことを「1. 芸術祭の評価軸」を中心にふりかえっておきたい。

先ず、瀬戸内国際芸術祭実行委員会による同芸術祭のねらいについて、地域づくり事業に焦点をあててみていこう。それは先述したように、「島のお年寄りたちの元気を再生する機会を作り出し」、さらには「次代を担う若者や子どもたちも含めた地域の人々と交流し協働することで、瀬戸内の未来を拓く大きな原動力」となることであった。

「島のお年寄りたちの元気を再生する機会を作り出し」についてみると、第11表や第12表から島が元気になった・活性化したことを多くの島民が指摘している。また、第9表の「地域内での高齢者の活躍の機会が増えた」では5段階評価で平均が3.10と住民の間でも見解の分かれる数値であった。ただし、年齢別でみると、65歳以上層（平均2.68）に対して、65歳未満層（3.46）のほうが有意に高かった。80歳以上になると、高齢のため芸術祭に何らかの関わりを持つことが難しくなるため、「高齢者の活躍の機会が増えた」と実感できないことが考えられる。80歳を超える高齢では芸術祭による「元気の再生」は難しいかもしれないが、そこまで高齢でなければ他の質問項目の評価からいっても、「元気を再生する機会を作り出す」ことができたといえるのではないだろうか。

「次代を担う若者や子どもたちも含めた地域の人々と交流し協働することで、瀬戸内の未来を拓く大きな原動力」となることについて、「瀬戸内の未来

(21) 今後の豊島について、どうあるべきか・どうあってほしいかについて、自由回答で尋ねたところ、「若い人が住める・働ける」(37.5%)、「船便・バス便の改善」(14.8%)、「島が活性化する」(13.5%)の順で回答が多かった。ここでも船、バスの改善が指摘されている。また、多くの島民は若い人が住める・働けるようになることを望んでいることがわかる。過疎化、高齢化の進行の中で、切実な思いであることがわかる。

を拓く大きな原動力」となったかは長期的な視点でみていく必要があるため置いておくとしても、「交流」については第11表、第12表、それらの具体的な回答例からも多く行われ、島民もそのことを非常に高く評価していることがわかる。何度も述べてきたように、人(若者)が大勢豊島に来て、島民と交流し、その結果として島に活気が出て、島民も元気になったということである。さらに、女性の活躍する機会の創出、交流により島民が改めて島の良さに気付くなど、交流は芸術祭の最も大きな意義の1つといえよう。

また、「協働」については、第8表からもレストランや作品制作にあたっての協働が一定程度みられたことは評価できる一方で、作品管理まではほとんど行われていないこと、第15表から今後は芸術祭に島民も積極的に関わらねばという指摘が無視できないほどあったことを考えると、今後のさらなる協働が島民からも望まれていることがわかる。芸術祭の悪かった点として出された「自転車・歩行者が道をふさいだ」、「船：便の悪さ、乗れなかった」など、訪問客の交通マナーと交通の便の悪さなどのインフラ関係、イベントでの騒音については、芸術祭実行委員会と島民とで次回芸術祭に向けて事前の話し合いなど是非とも実現させていってほしいところである。

次に、記述した室井の知見を確認・比較検討する。「①活気・にぎわい創出では大きな成果があった」については、本稿の分析でも同様のことが確認できた。人(若者)が豊島に来て、島民と交流し、その結果として島に活気が出て、島民も元気になったということであり、その評価は非常に高かったことはこれまでみてきたとおりである。

「②経済効果の有無が芸術祭の評価に与えている影響は限定的」ということについてである。本研究では経済効果について明示的に聞き取り調査を行わなかったが、第11表の自由回答を参照すると「経済効果があった」、「経済効果がなかった」と答えた人と満足度の平均はそれぞれ3人、4.33と4人、4.25であり、ほとんどその差がなかった。室井と同様の知見が確認できたといえる。

「③住民の芸術祭への関与が「芸術祭が島に好ましい変化をもたらした」規定力となっている」および「④住民の対外的な交流も「芸術祭が島に好ましい

変化をもたらした」規定力となっている」ことについては、第14表の「芸術祭への関わり」および「交流」の「あった」・「なかった」の事後満足度をみると、いずれも「あった」が「なかった」よりも満足度は高かったが、有意差はなかった。その意味では、芸術祭への関与、対外的な交流ともに「芸術祭が島に好ましい変化をもたらした」規定力となっているとはいえない。室井の知見と本研究との相違をもたらした要因は、本研究の研究対象地域であった豊島K地区では作品展示数も多く、レストラン開設もあって、作家やこえび隊と地域との関わりが深かったため、芸術祭への関与、交流がなかった人は他地域に比べて少なく、かつそのなかった人も芸術祭のことが地域で話題になったり、活気が出たことは認識していたため、満足度の評価が低くはなかったと考えられる。

「⑤交流はこえび隊、アーティストとの交流が観光客とのそれよりも重要であった」ことについては、本研究でも聞き取り調査の結果から確認できた。客の場合はあいさつ程度の交流が主なのに対して、アーティスト、こえび隊との場合は上述したように、彼らの真摯な取り組みに感心して島民も行動に移すといった生活面にまで影響を及ぼし、深い交流をしている場合が多い。

「⑥住民とこえび隊との交流は今でも続いている、それが最も大きな成果ともいえる」ことについては、地区内にできたレストランをはじめとした様々な交流が生まれ、それは調査時点でも継続しているようであったが、詳細は聞き取りをせず、確認できなかった。ただし、こえび隊スタッフの精力的な活動を島民が高く評価しているように、こえび隊との交流は島民に良い影響を与えたことは間違いない。

さらに、「大地の芸術祭」についての新潟県越後妻有地方の住民を対象とした調査研究における知見についても、室井のそれと重ならない部分で確認・比較検討しておこう。まず、「芸術作品に関する評価に関しては、住民の現代アートに対する評価は低いものではない」については、作品に対する評価の高さ(平均3.90)や第11表の「アートにふれた」、第12表の「芸術に興味を持つようになった」などの自由回答からも高かったといえよう。これと関連して、

景観、生活環境面においても芸術祭が島民に好意的に評価されていることを付け加えておく（第9表参照）。本研究でも越後妻有地方の研究における知見と同様のことが確認できた。

次に、プロジェクトに関する事前説明が十分に行われていたか否かによる現代アートへの好感度については、室井③④同様に、第14表の「事前の説明」の「あった」・「なかった」の事後満足度をみると、「あった」が「なかった」よりも満足度は高かったが、有意差はなかった。すなわち、事前説明が十分に行われていたか否かによる現代アートへの好感度についてはとくに差異が見出せなかった。本研究とのこのような相違をもたらした要因についても室井③④と同様であると考えられる。

豊島島民にとっての芸術祭の意義について、丹念な聞き取りによって調査を行った本研究が明らかにしたことは以上であるが、なかでも交流の意義を明らかにしたことは、島民も芸術祭に積極的に関わりたいと考えていることを明らかにしたことは大きいと考えられる。交流は島に活気や元気だけでなく、島民が改めて島の良さに気付き、誇りを取り戻すことにもつながった。また、島民も芸術祭に積極的に関わりたいということは、今後のさらなる協働が島民からも望まれているのであり、それは外部からの人（実行委員会・アーティスト・こえび隊・訪問客など）を巻き込んだ地域活性化をより一層深めることにつながるであろう。来年は第2回の瀬戸内国際芸術祭の年である。さらなる活性化に向けてよい方向に進むことを願うと同時に、筆者も協力できることはしたいと思う。

参 考 文 献

- 勝村（松本）文子他（2008）「住民によるアートプロジェクトの評価とその社会的要因—大
地の芸術祭 妻有トリエンナーレを事例として—」『文化経済学』第6巻第1号
瀬戸内国際芸術祭実行委員会（2010）『瀬戸内国際芸術祭2010 総括報告』
室井研二（2012）「瀬戸内国際芸術祭の住民評価とその規定因」香川大学瀬戸内圏研究セン
ター『瀬戸内海観光と国際芸術祭』、美巧社

参 考 サ イ ト

瀬戸内国際芸術祭

<http://setouchi-artfest.jp/>